

『経営に役立つヒント』

令和三年七月一日

第二百十八号

「いくら科学を研究しても、安心立命が得られるわけではない。あるいは自己を喪失することもある。魂の感動に基づかなければ真の生命を得ることはできない。」と、碩学安岡正篤師は言う。

武漢コロナに、世界が生命の危険はもとより、経済的・精神的・社会的に塗炭の苦しみを強いられています。武漢の研究所から漏れたコロナは、自然界にあるものではなく「遺伝操作された生物兵器」であると言われています。それを厚顔無恥な支那は、謝罪するどころか、報道官に「我が国の研究者にノーベル医学賞を出すように」と言わせる始末です。世界の笑いものです。

この支那に対して、毅然とした態度を示せない日本の政府（そのバックには、経済界の思惑がある）は、自由主義国の中での日本の存在感を自ら捨てているようなものです。一九八九年六月四日の「天安門」で、民主化を求める学生たち数千人を、人民解放軍の戦車で轢き殺しました。国際的に孤立した支那に、非難どころか、救いの手を差し伸べたのが日本でした。3兆円を超えるODAを支援しても感謝の言葉どころか、日本企業の技術や知識を盗み独自の開発とうそぶき、連日のように日本の領土である尖閣を奪いに来ているのです。

ウイグルでのジェノサイド（民族抹殺）も、公明党の山口と、自民党の二階によって、日本は骨抜きに対応に終わりました。ユニクロの柳井会長は「人権問題というよりも政治問題。我々は政治的に中立なんで、ノーコメントとします」という支那に強く出られない、ビジネスだけの判断しかできない日本と、世界は観ます。

「情熱と気魄、理想と寝食を忘れる勉強ぶり、偉大な人物に私淑し、万卷の書を読み、師友を求め、名山大川に遊び、醉生夢死にあきたらず、何か感激に死のうとするような、やむにやまれぬ魂こそ青年の尊い精神である」同安岡正篤師。

我々は、今こそ、こういう純粹な精神・魂・心を、取り戻す必要があります。

なぜ、儲ける必要があるのか？経営の本質は何か？そもそも、生きるとは、どういうことか？人生とは何か？こういう根本的な、本質的な問いに対する答えを追い求めず、その日その日を、バタバタと追われるように生きてきたことへの反省を迫っているのです。言い換えれば、戦略なく戦術のみで来たことへの反省です。

社長、『魂の感動』に基づく真の生命を掴んで参りましょう。

嗚呼、これが生きるということか！が実感できる勉強会『不易の会』を、今月二十三日の午後五時から毎月一回、三年間開催します。是非、一緒に学び、実践し、日本を良くして参りましょう。

今月のポイント

「不易」が流行を

チャンスにする

